



Title	老年期の時間的展望：未来事象に対する関心の強さとその評価について
Author(s)	大橋, 明
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1998, 3, p. 2-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11339
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

老年期の時間的展望

——未来事象に対する関心の強さとその評価について——

大 橋 明

過去や未来をどのように見通しているのかについて言及するために、時間的展望 (time perspective) という概念が用いられてきた。時間的展望を心理学の体系に導入した Lewin (1951/1997) は、時間的展望を「ある時点における個人の心理的未来及び心理的過去についての見通しの総体」と定義し、個人の行動は、現在の事態 (situation) にのみ依存するのではなく、心理的過去や心理的未来を包含した現在の生活空間に依存するとした。従って、個人の行動の意味を明らかにしていくためには、過去・現在・未来の力動的な相互作用の中で個人の生活空間を捉えなければならない (都築, 1993) と考えられる。

この心理的過去、心理的未来とは、実際にあった事態、個人の信念に伴い存在するであろうと考えられる事態にそれぞれ対応 (correspond) するものである。具体的に考えるならば、過去に牡蛎を食べて食中毒になった事象を思い出して、現在における個人が目の前にある牡蛎を食べないようにすることがある。また、癌になるという未来の事象を考える。そして不安になり、癌にならないように、現在における個人が刺激の強い食物を控える、煙草をやめるなどの行動を起こす。

すなわち過去の事態や事象 (events) を意識し、どのように意味づけるのが過去展望である。そして未来の事態や事象を意識し、どのように予期するかが未来展望である。Lewin (1951/1997) の言に従えば、その時間的展望が行動に影響を及ぼすのである。

ところで Lewin (1951/1997) は、事態と事象の相違について明確にはしていない。また、後悔、期待、希望などの感情は時間的展望の概念の枠組みに入るのかどうかという問題もある。すなわち、時間的展望の厳密な枠組みを考える際、事態や事象を意識することが時間的展望であるのか、その意識によって生じる感情をも包含したものが時間的展望であるのかという点が明確にされていない。

加えて、Lewin の理論については批判もなされている (London, 1944 ; 相良, 1948 ; 佐治, 1973 ; 日高・吉田, 1979)。これらの点については、稿を改めて考察したい。

さて、この時間的展望が確立するのは青年期であるとされる。Erikson (1959) によると、時間的展望の確立は青年期における課題「同一性の達成対同一性の混乱」の感覚のバランスをうまく取る上で重要である。何故なら、同一性の達成は過去・現在・未来という時間的な流れの中での自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成立するものだからである (都築, 1993)。

老年期においても、時間的展望は重要な問題である。Erikson, Erikson & Kivnick (1986) は、老年期の課題として「統合対絶望」すなわち「永続的な包括の感覚と、危機 (の感覚) や望みがないという感覚」(Erikson et al., 1986, p54 括弧内筆者) の感覚のバランスをとることを指摘している。統合とは、これまでの7種類の発達段階における経験を包括し、残された人生に関心を向けていこうとする老年期特有の働きである (菅沼, 1997)。一方、絶望とは、自分の人生を究極のものとして受容できず、死の恐怖に苛まれる

という感覚である。

すなわち老年期においては、過去を振り返り、自分の人生が変更不可能であることを認め、残り僅かであり絶望感をもたらす過去・現在そして未来を受け入れていくことが課題であり、その課題を達成するためには過去や未来の展望は必須である。

このような時間的展望について、老年期を対象にした研究は幾つか進められてきている。その多くは生涯発達の研究であった (Bortner & Hultsch, 1972 ; Hultsch & Bortner, 1974 ; Giambra, 1977 ; Shmotkin, 1991 ; Nurmi, Pulliainen & Salmela-Aro, 1992)。

老年期のみを対象とした研究では、過去や未来全般に対する感情的な評価について、すなわち「時間的態度」がまず第一に挙げられる。時間的態度については、年齢、性、健康状態、社会経済的地位、パーソナリティ、知能、居住形態、生活段階 (life staging)、活動水準、現在の満足度、自我同一性地位との関連性が検討されている (Lehr, 1984 ; Moriya, 1978 ; Lowry, 1984 ; 岡本, 1994 ; Whitbourne & Powers, 1994 ; 五十嵐, 1996)。

次に挙げられるのは、どの程度先の事象について意識しているか、所謂「時間的広がり」を検討した研究である。人生描写法 (life drawing) を実施した Whitbourne & Powers (1994) によると、加齢による差異は認められなかったものの、統制の所在が外的である対象者ほど、人生描写法において未来の占める割合が多かった。

そして、事象について検討した研究は、Whitbourne & Powers (1994) によって行われている。女性老人を対象としたこの研究では、幸福感の高い女性老人ほど外的統制を維持し、家族の事象を多く記述し、反対に個人的な事象の記述が減少していたことが報告されている。

この Whitbourne & Powers (1994) の研究では、記述された事象を個人に関する事象と家族に関する事象に分類、検討されている。従って、個人及び家族の事象以外の領域に関する事象の詳細が不明である。

すなわち、老年期のみを対象とした従来の研究においては、どのような未来の事態や事象を意識しており、またどのような事態や事象を意識した際にどのような感情的な評価がなされるのかが検討されていなかった。都築 (1982) は、時間的展望に関する研究をレビューし、今後の課題として、時間的展望の質的側面、すなわちある個人が自分の人生においてどのような目標や希望を思い浮かべるのか、その内容や意味づけについて検討していく必要性を示唆している。しかし、老年期を対象とした従来の研究では、「時間的態度」や「時間的広がり」についての研究がほとんどであり、時間的展望を構成する事態や事象については検討されてこなかったことが指摘される。

そこで、大橋 (1998) は、自由記述法によって老年期において展望される未来事象を広く抽出したところ、①病気・健康、②旅行や趣味などに関する余暇活動、③死、④天災、政治経済が中心となる社会問題、⑤子供・孫の成長、⑥家族や友人とのつきあいに関する対人関係、⑦同居・一人暮らし、⑧職業の8タイプに分類され、これらが老年期における主要な未来事象であることを示唆している。そのうち、①②については記述数が多く、また各タイプに属する事象の評価については、②⑤⑥では肯定的に評価される事象が、①③④では否定的に評価される事象がそれぞれ多くみられたことを報告している。

しかし、大橋 (1998) が用いたのは自由記述法であり、ある個人がたとえば癌という病

気になることを意識して記述したとしても、またある個人にとってはその事象が特別でないために意識されず記述されないということが起こり得ると考えられる。すなわち、老年期の人々がどのような内容の事象を強く意識しており、どのような評価をしているのかについては、各事象に関する構造的な質問項目を設定した上で検討する必要があると考えられる。

以上のことから、本論では大橋（1998）による結果をもとに、以下の仮説を検証することを中心として、老年期における未来事象の特徴について検討することを目的とした。

（仮説1）病気・健康、余暇活動については関心が強く、同居・一人暮らしや職業に関する事象については関心が薄い

（仮説2）余暇活動、子供・孫の成長、家族や友人とのつきあいに代表される対人関係に関する事象の評価は肯定的であり、病気・健康、死、社会問題に関する事象の評価は否定的である

本研究では、事象に対する関心の強さとその評価との関連性についても検討している。

方法

（1）対象者

岐阜県内に在住する60歳以上の居宅老人 168名を対象とし、そのうち 137名（Age：M=72.2, S.D.=5.63）を分析対象とした。

岐阜県の福祉事務所が主催する民生委員の大会出席者も対象者の中に多く含まれるので、民生委員の大会に出席していない対象者と区別して分析することとした。構成は、男性のみの民生委員群60名（Age：M=74.3, S.D.=4.60）、一般男性群35名（Age：M=71.1, S.D.=5.81）、一般女性群42名（Age：M=70.0, S.D.=5.86）である。

回答に不備のみられた29名及び女性の民生委員2名は分析から除外した。

（2）調査時期

1997年8～9月

（3）調査手続き

質問紙法である。調査用紙は福祉事務所職員により大会開催中に配布され、郵送により回収した。また大会に出席していない対象者については、老人会に委託し回収または1件ずつ訪問し依頼した上で郵送等により回収した（回収率 84.00%）。

（4）質問項目

未来事象に関する質問項目は、大橋（1998）の事象の内容を参考に、①自分の健康、②家族の健康、③息子・娘・孫の成長、④家族関係、⑤友人関係、⑥暮らしの変化、⑦余暇活動、⑧暮らし向き、⑨職業・仕事、⑩社会の出来事、⑪自分の死、⑫家族の死の12項目を設定した。

③息子・娘・孫の成長とは、自分の子供の結婚、孫の誕生・結婚、ひ孫の誕生という事象を意味する。④家族関係及び⑤友人関係とは、家族や友人とのつきあいに関することについて尋ねたものである。⑥暮らしの変化とは、同居・一人暮らしを意味する。⑦余暇活動とは、趣味・旅行など自分の好きな活動を尋ねたものである。そして、⑧暮らし向きとは、生計すなわち経済的な問題とかかわる事象である。

「これからのことについてどのように思い、考え、感じていますか」と各事象について

尋ねた。まず、よく考えるか否か、すなわち関心の強さを問い、「よく考える・あまり考えない」で回答を求めた。次に、安心していることか不安なことかを問い、「とても安心・やや安心・どちらでもない・やや不安・とても不安」の5段階で評定させた。

安心とした場合、その事象に対する評価が肯定的であり、不安とした場合、その事象に対する評価が否定的であるとした。

結果

1. 事象の関心の強さ

Table 1 は、未来の各事象について、「よく考える」「あまり考えない」とした対象者数の割合を老年期全体で示したものである。

Table 1 未来の各事象について

「よく考える」「あまり考えない」とした対象者数（老年期全体）

	①自分の健康	②家族の健康	③息子・娘・孫の成長	④家族関係	⑤友人関係	⑥暮らしの変化
考える	118(86.13)	119(86.86)	87(65.41)	80(59.70)	64(47.06)	48(35.04)
考えない	19(13.87)	18(13.14)	46(34.59)	54(40.30)	72(52.94)	89(64.96)

	⑦余暇活動	⑧暮らし向き	⑨職業・仕事	⑩社会出来事	⑪自分の死	⑫家族の死
考える	77(56.20)	61(44.53)	18(13.53)	75(54.74)	37(27.21)	46(50.55)
考えない	60(43.80)	76(55.47)	115(86.47)	62(45.26)	99(72.79)	91(49.45)

(): %

χ^2 検定の結果、①自分の健康、②家族の健康、③息子・娘・孫の成長、④家族関係に関する事象については、関心の強い対象者が多くみられた（①自分の健康： $\chi^2=71.54$, $df=1$, $p<.001$ ；②家族の健康： $\chi^2=74.46$, $df=1$, $p<.001$ ；③息子・娘・孫の成長： $\chi^2=12.64$, $df=1$, $p<.001$ ；④家族関係： $\chi^2=5.04$, $df=1$, $p<.05$ ）。

一方、⑥暮らしの変化、⑨職業・仕事、⑪自分の死、⑫家族の死に関する事象については、関心の薄い対象者が多くみられた（⑥暮らしの変化： $\chi^2=12.27$, $df=1$, $p<.001$ ；⑨職業・仕事： $\chi^2=70.74$, $df=1$, $p<.001$ ；⑪自分の死： $\chi^2=28.26$, $df=1$, $p<.001$ ；⑫家族の死： $\chi^2=14.78$, $df=1$, $p<.001$ ）。

Table 2 各事象に対して「よく考える」とした対象者数（民生委員群・一般男性群・一般女性群）

未来の事象	①自分の健康			②家族の健康			③息子・娘・孫の成長			④家族関係		
	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女
人数	60	35	42	60	35	42	58	34	41	59	34	41
よく考える人数	51	31	36	55	28	36	39	20	28	37	19	24

未来の事象	⑤友人関係			⑥暮らしの変化			⑦余暇活動			⑧暮らし向き		
	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女
人数	59	35	42	60	35	42	60	35	42	60	35	42
よく考える人数	35	16	13	21	13	14	36	16	25	29	13	19

未来の事象	⑨職業・仕事			⑩社会の出来事			⑪自分の死			⑫家族の死		
	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女
人数	57	34	42	60	35	42	59	35	42	60	35	42
よく考える人数	10	4	4	36	19	20	13	10	14	20	12	14

Table 2 は、民生委員群、一般男性群及び一般女性群において、「よく考える」と回答した対象者数を示したものである。民生委員群と一般男性群、一般男性群と一般女性群において関心の強さ別にみた対象者数を χ^2 検定で比較したところ、どの事象についても有意な偏りはみられなかった。

2. 事象に対する評価

Table 3 各事象の評価別対象者数（老年期全体）

	①自分の健康	②家族の健康	③息子・娘・孫の成長	④家族関係	⑤友人関係	⑥暮らし変化
安心	62(45.25)	72(52.55)	91(66.42)	96(70.07)	89(64.96)	58(42.33)
どちらでもない	18(13.14)	14(10.22)	28(20.44)	28(20.44)	43(31.39)	42(30.66)
不安	57(41.61)	51(37.23)	18(13.14)	13(9.04)	5(3.65)	37(27.01)

	⑦余暇活動	⑧暮らし向き	⑨職業・仕事	⑩社会出来事	⑪自分の死	⑫家族の死
安心	86(62.77)	87(63.50)	52(37.96)	26(18.98)	38(27.74)	32(23.36)
どちらでもない	46(33.58)	22(16.06)	75(54.74)	36(26.28)	52(37.95)	58(42.33)
不安	5(3.65)	28(20.44)	10(7.30)	75(54.74)	47(34.31)	47(34.31)

() : %

Table 3 は、5段階で評定された各事象における評価得点を、「とても安心・やや安心」「どちらでもない」「やや不安・とても不安」の3段階に分類し直した上で、それぞれの人数を示したものである。

③息子・娘・孫の成長、④家族関係、⑤友人関係、⑦余暇活動、⑧暮らし向きに関する事象については、肯定的に評価する対象者が60%以上であり、これらの事象が全般的に肯定的に捉えられている傾向にあることが推測される（③息子・娘・孫の成長： $\chi^2=68.60$, $df=2$, $p<.001$ ；④家族関係： $\chi^2=85.68$, $df=2$, $p<.001$ ；⑤友人関係： $\chi^2=77.49$, $df=2$, $p<.001$ ；⑦余暇活動： $\chi^2=71.84$, $df=2$, $p<.001$ ；⑧暮らし向き： $\chi^2=56.51$, $df=2$, $p<.001$ ）。

反対に、⑩社会の出来事は、否定的な評価をする対象者が過半数を占めていた（ $\chi^2=29.36$, $df=2$, $p<.001$ ）。

①自分の健康、②家族の健康については、肯定的に評価する対象者と否定的に評価する対象者がともに多くみられた（①自分の健康： $\chi^2=25.42$, $df=2$, $p<.001$ ；②家族の健康： $\chi^2=37.77$, $df=2$, $p<.001$ ）。

⑨職業・仕事、⑫家族の死については、中立的な評価をする対象者が多くみられた（⑨職業・仕事： $\chi^2=47.58$, $df=2$, $p<.001$ ；⑫家族の死： $\chi^2=7.46$, $df=2$, $p<.05$ ）。

⑥暮らしの変化、⑪自分の死という事象については、人数に偏りはみられず、肯定的・中立的・否定的に捉える対象者がおおそ等しかった。

Table 4 には、民生委員群、一般男性群及び一般女性群における、各事象の評価得点の平均を示した。

分散分析の結果、民生委員と一般男性群とでは、①自分の健康、⑪自分の死の各事象で評価得点に有意差がみられ、⑩社会の出来事では有意傾向が認められた。これらの事象については、民生委員群の方が一般男性群よりも評価が高かった（①自分の健康： $F(1,93)=4.53$, $p<.05$ ；⑪自分の死： $F(1,92)=5.34$, $p<.05$ ；⑩社会の出来事： $F(1,93)=3.09$, $p<.10$ ）。

一般男性群と一般女性群とでは、各事象の評価得点に有意な差は認められなかった。

Table 4 各事象の評価得点（民生委員群・一般男性群・一般女性群）

未来の事象	①自分の健康			②家族の健康			③息子・娘・孫の成長			④家族関係		
群	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女
人数	60	35	42	60	35	42	58	34	41	59	34	41
平均得点	3.33	2.89	2.69	3.30	3.20	2.93	3.73	3.47	3.61	3.81	3.56	3.66
S.D.	0.93	1.08	1.14	1.01	1.05	1.11	0.81	0.86	0.97	0.78	0.93	0.86

未来の事象	⑤友人関係			⑥暮らしの変化			⑦余暇活動			⑧暮らし向き		
群	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女
人数	59	35	42	60	35	42	60	35	42	60	35	42
平均得点	3.75	3.60	3.71	3.30	3.17	3.10	3.67	3.57	3.79	3.68	3.35	3.48
S.D.	0.70	0.74	0.60	0.93	0.92	1.08	0.75	0.74	0.65	0.85	1.07	1.09

未来の事象	⑨職業・仕事			⑩社会の出来事			⑪自分の死			⑫家族の死		
群	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女	民生	男	女
人数	57	34	42	60	35	42	59	35	42	60	35	42
平均得点	3.39	3.26	3.19	2.80	2.46	2.26	3.22	2.77	2.62	3.00	2.80	2.71
S.D.	0.80	0.83	0.74	0.94	0.89	0.89	0.83	1.03	1.01	0.88	0.83	1.07

3. 事象の関心の強さと評価との関連性

Table 5 は、各事象の関心の強さとその評価得点との相関係数を、民生委員群、一般男性群及び一般女性群別に示したものである。正の相関は、対象者がその事象に関心が強い場合、その評価は肯定的であることを示している。反対に、負の相関の場合は、その事象に関心が強い場合、その事象の評価は否定的であることを示している。

Table 5 各事象に対する関心の強さと
その評価との相関係数（民生委員群・一般男性群・一般女性群）

未来の事象	①自分の健康	②家族の健康	③息子・娘・孫の成長	④家族関係	⑤友人関係	⑥暮らしの変化
民生委員群	-.1009	-.0900	.0499	.0864	.3615	-.0495
一般男性群	-.2921	-.0413	-.0290	.0248	.4272	-.3398
一般女性群	.0087	-.0265	-.0586	.2460	.1499	-.2530

未来の事象	⑦余暇活動	⑧暮らし向き	⑨職業・仕事	⑩社会の出来事	⑪自分の死	⑫家族の死
民生委員群	.2282	-.0322	.0042	-.2495	.2546	-.3634
一般男性群	.3037	-.1486	-.1185	-.3078	-.3555	-.1906
一般女性群	.2554	-.3062	-.0466	-.3946	-.0843	.0480

民生委員群では、⑤友人関係で弱い正の相関が、⑫家族の死で弱い負の相関がみられた。一般男性群では、⑤友人関係で中程度の正の相関が、⑦余暇活動で弱い正の相関が認められた。一方、⑥暮らしの変化、⑩社会の出来事、⑪自分の死では、弱い負の相関がみられた。

そして一般女性群では、⑧暮らし向き、⑩社会の出来事で、弱い負の相関が認められた。

考察

1. 関心の強さについて

未来の各事象において、①自分の健康、②家族の健康、③息子・娘・孫の成長、④家族関係に関する事象に関心が強く、⑥暮らしの変化、⑨職業・仕事、⑪自分の死、⑫家族の死に関する事象には、関心の薄いことが認められた。病気・健康、余暇活動については関心が強く、同居・一人暮らしや職業の事象については関心が薄いという仮説1は、余暇活動に関する事象を除き支持された。

民生委員群、一般男性群及び一般女性群で関心の強さに関する対象者数に偏りがみられなかった。このことから老年期全体の結果は、性別や社会的役割の有無を超越した、老年期の未来事象の展望に関する一般的な状態像を示していることと推測される。

自分や家族に関する事象(①②③④)については、概して関心が強い。Cumming & Henry (1961) は、老年期に入ると生活空間が縮小し、興味や関心は次第に狭められ、これまで維持してきた社会関係から離脱していく過程の存在を指摘している。

本研究においても、⑨職業・仕事は関心の薄い対象者が有意に多く、また⑤友人関係、⑩社会の出来事の各事象についても、①自分の健康、②家族の健康、③息子・娘・孫の成長、④家族関係に関する事象のように、関心の強い対象者が有意に多いという結果は認められなかった。すなわち、Cumming & Henry (1961) の示唆する離脱が未来事象に対する関心においても行われていることが推測される。

しかし、これらの事象に対する関心が、いつ頃から減弱しているのかについては明らかではない。それゆえこの点を明確にするには、中年期及び青年期を包括した生涯発達の見地から各段階を追って検討することが必要であろう。

⑥暮らしの変化、⑪自分の死、⑫家族の死については、身近な事象であるが関心の薄い対象者が多くみられた。

これらの事象について関心が薄い理由として、死と直接繋がる事象であることが考えられる。Erikson et al. (1986) は、老年期の心理社会的発達課題として「統合対絶望」の感覚のバランスをとることであることを指摘している。そして、死が不可避のものであるという確信を持った後、よくわからないものに疑念を持ち、不安と切り離せず、うまく折り合おうとして、完全に無視しようとしていることを示唆している。

⑥暮らしの変化とは、同居や一人暮らしという事象を意味する。すなわち、長年連れ添った配偶者と死別することを意味するのかもしれないし、家族と別れて老人ホームに入居することを意味するのかもしれない。この意味で、永遠の離別に直結する事象であると考えられる。⑪自分の死、⑫家族の死については言うまでもない。

荒井(1994)は、老年期において死が恐ろしいものとして考えられている理由として、未知のものであること、自分自身がなくなること、孤独になること、家族を失うことなどを挙げている。⑫家族の死、⑥暮らしの変化とは、家族を失い、自分に孤独が訪れることに繋がり、そして⑪自分の死とは、まさに自分自身を失うことである。老年期の人々にとって、これらの事象の展望は、大きな不安をもたらすことが推測される。そして、考え悩んでも、死という事象は必ず到達し、止めることができない。それらの不安とうまく折り合うため、無視、すなわち意識しないようにしようとしているのかもしれない。

また、これらの事象は、自らではどうすることもできない統制不可能な事象であると考

えられる。それゆえ「どうすることもできない」ため「考えても仕方がない」と捉えているのかもしれない。

事象に対する関心の機制については、今後更なる検討が必要であると考えられる。

2. 事象の評価について

③息子・娘・孫の成長、④家族関係、⑤友人関係、⑦余暇活動、⑧暮らし向きの各事象において、多くの対象者が「非常に安心・やや安心」と肯定的に評価していた。これらの事象が全般的に肯定的に捉えられている傾向にある。反対に、⑩社会の出来事については、「非常に不安・やや不安」と否定的に捉えられている傾向にあることが示された。

①自分の健康、②家族の健康、⑥暮らしの変化、⑪自分の死についての評価は、明確な傾向が示されなかった。このことから、仮説2は、肯定的な事象については支持されたが、否定的な事象については⑩社会の出来事以外は支持されなかった。

①自分の健康、②家族の健康、⑥暮らしの変化、⑪自分の死に関する事象の評価は、主体である個人の状況によって異なることが推測される。どのような現在の状況が評価を変容させるのかについては、今後の課題としたい。

3. 事象の関心の強さと評価との関連性

民生委員群では⑫家族の死、一般男性群では⑪自分の死をよく意識している対象者は、これらの事象を否定的に捉えていることが示された。民生委員群では重要な他者の死を、一般男性群では自分の死をそれぞれ展望した際に否定的な感情が生ずることが認められた。

男性においては、家族との離別や自分の死という自分や重要な他者の「生命」の根底を揺るがしかねない未来事象の展望は否定的な感情をもたらすことが推測される。

ところで民生委員の役割とは、地域の中で一人暮らしの老人や老人だけの世帯、自分の力だけでは日常生活を送れない人の日々の生活を見守る、すなわち安否や健康状態の確認をし、必要に応じた福祉・保健などのサービスが適切に提供されるよう支援活動を行うことである（厚生省社会・援護局地域福祉課，1997）。

従って、介護を必要とする人の世話をし、いろいろな人の死も看取ってきていることが考えられ、死については達観していることが推測される。実際、①自分の健康や⑪自分の死という自分に関わる事象については、一般男性群と比較して肯定的に評価している。しかし、⑫家族の死という事象については、民生委員群のみで、関心の強い対象者は関心の薄い対象者よりも評価が否定的であった。この差異を引き起こした理由として、民生委員という役職柄、他者への視線が保たれていることが指摘される。また、民生委員となる人の責任感などを構成するパーソナリティの問題などが絡んでいるのかもしれない。この差異の生ずる理由については、更なる検討が必要であると考えられる。

一般女性群では、⑧暮らし向き、⑩社会の出来事で負の相関がみられた。女性は男性と比べて、生計、災害、生活環境の変化など、生活の土台を揺るがしかねない事象の展望は否定的な感情をもたらすことが推測される。

また、民生委員群と一般男性群において、⑤友人関係で関心の強さとその評価との間に正の相関がみられた。このことは、友人とのつきあい、他者との関わりに関する未来事象の展望が、男性にとって肯定的な感情をもたらすものであることを示していると推測される。

以上のように、老年期において展望される未来事象の特徴について検討してきた。Erikson, et al. (1986) は、老年期において絶望感をもたらす局面、すなわち「違うものであったらと熱望する過去の局面」「絶え間のない痛みを引き起こす現在の局面」「はっきりとせず恐ろしい未来の局面」及び「逃れられない死」が存在することを指摘している。また、その局面を無視するのではなく認め、受け入れることが重要であるとしている。

本研究において、関心の薄い事象すなわちあまり展望されない事象、あるいは展望すると特に否定的な感情をもたらす事象は、⑥暮らしの変化、⑧暮らし向き、⑩社会の出来事、⑪自分の死、⑫家族の死であった。これらの事象について共通するタームは「喪失」ではないだろうか。

これらの「喪失」に関わる事象について、単に無視した方がよい、考えない方がよいというものではないと思われる。Frank (1939) は、個人が未来の事象を予期し、あらかじめ備えることによって、将来の不安から解放されるとした。すなわち、死や経済的問題、天災などについて展望することで、その際の自分の状況を予期し、そのための対応を考えることができるのである。

例えば、死について考えるならば、自分の死をいつ頃のことと展望することで、自分の人生を見つめ直し、他者との関わりを大切にすることなどを考えることができる。家族の死が間近だと予測すれば、共有できる残りの時間を有意義に使うと意識することができるかもしれない。

もし経済的な不安があるとするならば、今の生活を慎ましやかにして対応することができる。病気になるという事象から不安になれば、今の食生活を考え直したり、体を大切にしようとする意識も湧いてくるかもしれない。

しかし、自分の死や家族の死という未来の事象の展望によって、抑鬱状態になることもあり得る。特に、末期を宣告された患者にその傾向がみられる。このように、未来展望とは、現在における個人に希望をもたらす、一方では絶望感をもたらす表裏一体の機制であると言えるのかもしれない。

展望して楽しいこと、希望につながるような事象についてはよしとしても、考えると不安なことについては Erikson, et al. (1986) が指摘するように、無視するのではなく、認め受け入れることが大切である。そして、その事象について深く考え過ぎて、強い絶望に苛まれることのないことが、生き生きとした生活を送るためには大切であると思われる。

どのような未来の事象を意識し、どのように予期するか、捉えるかは、現在における個人によって大きく変容すると考えられる。それゆえ、現在と未来との関連についての考察は不可欠であると考えられるが、稿を改めて行うこととしたい。

引用文献

- 荒井保男 1994 老年期と死 荒井保男・星薫(編著) 老年心理学 財団法人放送大学教育振興会
- Bortner, R.W., & Hultsch, D.F. 1972 Personal Time Perspective in Adulthood. *Developmental Psychology*, 7, 98-103.
- Cumming, E., & Henry, W.E. 1961 *Growing Old: The Process of Disengagement*. Basic Books, New York.

- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press, Inc.
- Erikson, E.H., Erikson, J.M., & Kivnick, H.Q. 1986 *Vital Involvement in Old Age*. W.W. Norton & Company, New York.
- Frank, L.K. 1939 Time Perspectives. *Journal of Social Philosophy*, 4, 293-312.
(白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房 より引用)
- Giambra, L.M. 1977 Daydreaming about the Past : The Time Setting of Spontaneous Thought Intrusions. *The Gerontologist*, 17, 35-38.
- 日高三喜夫・吉田昭久 1979 Time Perspective と Personality との関連 —— 問題提起 —— 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学・芸術), 28, 139-158.
- Hultsch, D.F., & Bortner, R.W. 1974 Personal Time Perspective in Adulthood : A Time-sequential Study. *Developmental Psychology*, 10, 835-837.
- 五十嵐敦 1996 高齢者の人生展望とその評価 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 52.
- 厚生省社会・援護局地域福祉課 1997 民生委員・児童委員活動の手引 —— 地域の身近な支援者として —— 社会福祉法人全国社会福祉協議会
- Lehr, U. 1984 Attitudes towards the Future in Old Age. *Human Development*, 10, 230-238.
- Lewin, K. 1951 *Field Theory in Social Science : Selected Theoretical Papers*. New York : Harper & Brothers. (1997 Reprinted in the American Psychological Association : Washinton, DC.)
- London, I.D. 1944 Psychologists' Misuse of the Auxiliary Concepts of Physics and Mathematics. *Psychological Review*, 51, 266-291.
- Lowry, J.H. 1984 Life Satisfaction Time Components Among the Elderly : Toward Understanding the Contribution of Predictor Variables. *Research on Aging*, 6, 417-431.
- Moriya, K. 1978 Older People's Attitudes towards the Future. *Geropsychological Research*, 4, 37-43.
- Nurmi, J.-E., Pulliainen, H., & Salmela-Aro, K. 1992 Age Differences in Adult's Control Beliefs Related to Life Goals and Concerns. *Psychology and Aging*, 7, 194-196.
- 大橋明 1998 老年期の未来展望 —— 意識される未来の事象とその評価、時間帯 —— 東海心理学会第47回大会発表論文集 (印刷中)
- 岡本祐子 1994 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 風間書房
- 相良守次 1948 クルト・レヴィーンとその心理学 思想, 284, 37-54.
- 佐治守夫 1973 Lewin の人格理論 八木晃 (監修) 佐治守夫 (編) 講座心理学第10巻 「人格」 東京大学出版会
- Shmotkin, D. 1991 The Role of Time Orientation in Life Satisfaction across the Life Span. *Journal of Gerontology : Psychological Sciences*, 46, P243-P250.

- 菅沼真樹 1997 老年期の自己開示と自尊感情 教育心理学研究, 45, 378-387.
- 都築学 1982 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, 30, 73-86.
- 都築学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- Whitbourne, S.K., & Powers, C.B. 1994 Older Women's Constructs of Their Lives : Quantitative and Qualitative Exploration. *International Journal of Aging and Human Development*, 38, 293-306.